

栗ヶ沢バプテスト教会 26-03-22 主日礼拝説教
「ヴィア・ドロローサ」ルカ 23：26-31 木村一充牧師

3月も第4週となり、イースター礼拝まであと2週間となりました。来週はいよいよ受難週と呼ばれる主イエスの最後の1週間が始まる日曜日となります。そのような教会の暦を過ごす中で、この朝お読みいただいた聖書箇所は、ルカによる福音書23章26節以下です。主イエスが総督ピラトのもとで裁判を受け、有罪の宣告を受け、処刑場までの道を歩いてゆく場面が、ここに描かれています。すぐ前の段落を読むと、ピラト本人はイエスを死罪にしたいはなかったことが書かれています。ユダヤの神殿当局が訴えるように、イエスがローマへの反逆を企てたり、民衆を扇動してローマに反旗を翻すような戦いの指揮を執ったりした形跡は認められなかったからです。そこで、ピラトはイエスをむち打ちの刑に処したうえで、釈放しようと考えていました。あるいはその代案として、過越祭の恩赦としてイエスを放免しようと考えていました。しかし、ユダヤ人たちは、ことごとくそれを許しませんでした。イエスではなく、暴動と殺人を犯したバラバの方を釈放するように求めました。ピラトは群衆の声を聞きました。そうした背景には、ピラトはユダヤの総督としてこれまで何度か重大な失政を犯してきた事情があったようです。ユダヤ人たちはピラトの足元を見て、ピラトを脅して、イエスに対する死刑を宣告させたのです。

こうして、ピラトはイエスを鞭で打った後、その身柄をユダヤ人たちに引き渡します。ローマに反逆した政治犯として処刑されることになったイエスは、ゴルゴタと呼ばれる丘に向かって十字架を背負って歩いてゆくのですね。この道は、現在「ヴィア・ドロローサ」（悲しみの道）と呼ばれており、イエスが有罪宣告を受けた場所（ピラトの官邸の庭）から、主が墓に納められた場所とされる聖墳墓教会までのおよそ500メートルの行程を指します。2012年の3月、前任教会の時代、イスラエルを旅行してエルサレムを訪れた際に、私どもはこのヴィア・ドロローサを歩きました。そこは、石畳の通りで、坂道の多い狭い通りでしたが、この道を重い十字架を背負ってイエスが歩かれたのかと思うと、胸が締め付けられるような思いがしました。ところで、この十字架への道行きを思い起こすために、その行程を14の場面に分けて、ほぼすべてのカトリック教会の礼拝堂の壁に14枚の絵、もしくは14個の十字架が掛けられています。人々が、その絵の前で立ち止まり、そこに描かれている主イエスの歩みを思い起こしながら、黙想し、祈るということをします。最初の場面はイエスが有罪宣告を受ける場面です。最後の場面は、イエスが墓に納められる場面です。これらは、英語でstation、日本語で「留」と呼ばれます。「停留書」の「留」ですね。これは15世紀のある修道会から始まって、たちまち広まった慣習であると言われます。この14の場面の詳細がどうなっているのか。そのすべてをここでご紹介はできませんが、たとえば、その中に「イエスが三度倒れる」という事件があります。その3度の場面がすべて「留」として覚えられています。とくに注意しておきたいことは、本日の箇所には描かれている二つの中心の出来事が、いずれも14の「留」の中の一つとして覚えられているということです。一つは、キレネ人シモンの物語であり、もう一つは主イエスがエルサレムの婦人たちに向かって語りかけられるという場面です。本日は、この二つの事柄から響いてくるメッセージに耳を傾けたいのです。

その第一は、刑場へと歩む道の途中でキレネ人シモンがイエスの十字架と一緒に担がされるという出来事です。このシモンという人がどのような人物だったのか。さまざまな想像がなされます。のちにキリスト者となったと言われ、教会の指導者になったとさえ見られます。キレネとはアフリカの北西部、地中海沿岸の町で現在のトリポリにある町です。BC6世紀、イスラエルがバビロニアによって滅ぼされた後、ユダヤ人たちは離散の民として各地に移り住みましたが、キレネにもユダヤ人の居住区ができたようです。過越しの祭りに合わせて、シモンは、はるばるキレネからエルサレムに巡礼に訪れていたのだと見ることができます。もしくは、26節に「田舎から出てきた」とあります。新しい聖書協会共同訳聖書では、ここを「畑から帰ってきた」と訳しています。「田舎」を「畑」と訳すこともできるからです。この訳だと、シモンはキレネ出身だったが、エルサレムに帰ってきて、農業をしながら近くで暮らしていたということになります。いずれにせよ、大切なことはこのときシモンにとって思いもかけないことが起こったということです。過越しの祭りの季節に、エルサレムの都の郊外を歩いていたら、たまたまイエスが刑場に引かれてゆく場面に出くわした。見物人の一人として様子を眺めていたら、突然兵士たちにつかまってイエスが負う重い十字架と一緒に担ぐように命じられた。シモンにしてみれば、とんでもない災難であり、迷惑な話です。しかし、ローマ兵の命令ですから断ることもできません。シモンは「なぜ、このわたしがこの男の十字架と一緒にかつがされるのだろう？ 理不尽な話だ」と思ったに違いありません。しかし、この場面を描くメル・ギブソン監督の映画「パッション」を見てみると、処刑場までの道でその重さによるめくシモンを逆にイエスが助け起こし、その十字架を背負うという場面が出てくるのです。それは何を意味するのでしょうか。

このルカ福音書9章23節で、イエスは「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言われています。すなわち、ここではイエスの十字架を背負って歩くシモンの姿に、そのままイエスの弟子の姿が重ね合わされているのです。しかし、十字架を負うことは、だれもが好き好んで、我先にやりたいと思うような事ではありません。シモンもそうでした。同じ出来事を描く並行記事で、マタイ福音書27章は「イエスの十字架を、無理に担がせた」と書きます。福音書記者が記すとおり、イエスの弟子とは主の十字架を強いられて負う者のことではないのでしょうか。

2007年の9月に、前任教会においてそれまで協力牧師だった立場から、主任牧師として迎えられました。会社勤めをやめて、その年の暮れから主任牧師として働き始め、翌年の2月に就任感謝礼拝を近隣の諸教会に案内してお

こないました。その日会堂の一階も半二階も、いずれも満員で会堂には160人を超える人が集まったのであります。礼拝後に、隣の教育館で祝会が行われたのですが、その時に大井教会から駆けつけてくださったある旧知の信徒の方から「木村先生、おめでとうございます」と言われたのです。けれども、その時、私は手放しでその言葉を受け入れることはできませんでした。教会が一人の欠けた器を牧師として招くということ、それは喜びの出来事であると同時に、共に重荷を負うてゆくことを受け入れることであります。この牧師、何とかならないものかと、時には不満やつぶやきが生まれることさえあるに違いないのです。けれども、そのような不完全なものが、説教や牧会という貴いわざを担うことが赦されています。教会員の皆さまに我慢してもらわねばならない。結婚もそうですが、共に生きる家族において大切なものは、一時的な感情ではありません。そうではなく、共に見上げるものを持つということ、第一のものを第一にしてゆくという覚悟です。その覚悟のもとで、自分ができる精一杯のささげものを神への奉仕としてささげてゆくこと、それがキリスト者の生き方です。シモンは、新約聖書の中でただ一人、主が負われた十字架を共に担う羽目になった人物でした。しかし、別な見方をすれば、主が負われた十字架を共に担う恵みに与ることができた人物であります。主の十字架の重さを知った人物として、シモンの名前は人々に永久に記憶されるに違いありません。

二つ目の出来事は、主イエスが自分のあとについてきた婦人たちの方を振り向いて言葉を発せられたという出来事です。それは、イエスが十字架につかれる前に最後に発せられた言葉でした。この婦人たちはエルサレム近辺に住んでいて、イエスの評判を聞きつけ、この人の十字架への歩みを見てみようと思った人たちだったと思われる。あるいは、当時のユダヤで葬儀や罪人が処刑される前に悲しみを演出するために同行した「泣き女」と呼ばれる女性たちだったと考える人もいます。いずれにせよ、彼女たちは、ここで十字架を負うことに耐えられなくなるほど衰弱したイエスのお姿を見て、嘆き悲しまずにはいられなかった。しかし、その婦人たちを見てイエスは「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と子どもたちのために泣け」と言われます。悲しむべきは、目の前にいる自分の運命や悲惨さではない。あなたがたが「お気の毒に」とか「かわいそうに」と、他人事のように悲しんでいる場合ではない。そうではなく、主の十字架は、ほかでもないイスラエルの民、神の民全体の罪を負うための出来事なのだと悟りなさいと、主は言われる。神の怒り、神の裁きの大きさのゆえに、むしろ女性が子どもを産まないことの方が幸いだと思えるような苦難の時代が来るといいます。主の十字架は、神の御子が私たち自身の罪を負われる出来事です。31節に「生の木さえこうされるなら、枯れた木はどうなるだろうか」とあります。ある「生の木」とは、イエスご自身のことを指し、枯れた木は不信の民イスラエルのことを指していると読めます。3月2週におこなわれた「賛美歌を歌う会」で、「カルバリ山の十字架につきて」という賛美を歌いました。その最後の歌詞は「カルバリの十字架、わがためなり」です。受難節のただなかを過ごしなが、私たちの神が高い栄光の座にあるだけでなく、十字架の低みにまで降りてきてくださり、私たちの負うべき十字架を負うてくださった。その救いのみ業を深く心に刻みたいのであります。

お祈りいたします。